

交流と研究の活性化を支える支部活動



富 安 卓 滋

2022年度九州支部長をおおせつかりました。鹿児島大学大学院理工学研究科の富安卓滋と申します。支部長就任にあたり、改めて考えてみたのですが、研究は一人で黙々とできるものであったとしても、他の方々と議論する中で新しい視点を導入できたり、見落としているポイントを発見できたりすることで、さらに研究を高みに持っていくことができる。そのために学会という組織が構成されてきたのだと理解しています。支部の存在意義は、より距離的に近いところで、それぞれの地域の状況に応じて、より密接なきめの細かい交流を通じて、研究を活性化させ、支部というスケールだからこそ可能となる取り組みを実施し、分析化学の裾野を広げていくこと。それが翻って、学会全体が大きく育つエネルギーを生み出すことになるのでしょう。

交流と研究の活性化は切り離せないものであると考えていますが、コロナ禍の中、参加者の安全確保、そして、医療現場をこれ以上^{ひっばく}逼迫させないために、組織としての活動のあり方を検討する中で、2022年度の九州支部としての主要な活動である第35回若手研究講演会および第40回夏季セミナーは、オンラインで実施することになりました。組織として、構成員の安全を確保することを第一に考えたコロナ対応が求められる中で、コミュニケーションのツールは、劇的に進化を遂げ、オンラインだからこそできる開催の形や工夫がなされてきています。その一方で、やはり顔を直接合わせて議論することで得られるものも間違いなくあるはずですが、そして、学会活動の原点となる熱感を感じられる交流をどのように実現するのか、が、今問われているように思えます。組織だった大きなイベントができなければ、何もできないということではなく、例えば、大学内、県内、地区内など、状況を判断しつつ、例え小さくてもその分小回りの効く研究交流を計画し、実施することができれば、そして、その経験を共有する場として支部が活用されれば、それが分析化学会としての大きな力につながってゆくものと考えています。

最後に、この原稿を書いている現在（2022年6月）は、コロナによる活動の制約に加えて、ロシアのウクライナ侵攻で顕在化した国際社会の不安定さを考えせられる状況になっています。科学、技術、文化の進展、そして、人類の福祉に寄与することを目的として設立された日本分析化学会の活動も然り、平和の中でこそ、交流に根差した自由な研究や学問の進展が担保されることをあらためて感じています。交流のない、すなわち、分断された中での“進展”は歪なものとなる危険性も^{ほら}孕みます。拙文の掲載される「ぶんせき」誌11号の発行されるころには、少しでもこの状況が改善されていることを願ってやみません。

〔Takashi TOMIYASU, 鹿児島大学大学院理工学研究科, 日本分析化学会九州支部長〕